

柳田民俗学に於ける「郷土」とマルクス主義者

——一九四二年夏 福本和夫の故郷再訪——

鶴 見 太 郎

一 はじめに

戦時下の柳田民俗学

柳田国男の想定した「郷土」の重要な構成要素が、各々の土地で氏神信仰を基礎に培われた心意伝承だったことは『民間伝承論』（一九三四年）、さらにその翌年上梓された『郷土生活の研究法』^①によってほぼ定まったといえる。こうした柳田の意識とは別個に、一九四〇年代に入って繰り広げられた翼賛文化運動下で盛んに「家、地方、郷土」といった言葉が称揚され始める。一九四三年八月に大政翼賛会調査会第五委員会が提出した「家」ニ関スル調査報告書^②の一般方針で、「家」ヲ中心スル祭祀及行事ノ復活^③が骨子の一つに定められたのは、その一端であろう。

これら一連の上からの郷土宣揚に対して、柳田が日本少国民文

化協会顧問（四二年二月）、日本文学報国会理事（四二年六月）

への就任に見られる名目的な関与をしたことは広く知られている。

しかしながら「郷土」をめぐる柳田の枠組みは微動を含みながらも変わることはなかった。一九四〇年の東京帝大全学会に於ける「日本の祭」、翌四一年の神社精神文化研究所での「神道と民俗学」が示唆するところは、婉曲だが「郷土」の氏神信仰と国家神道を区別することにあつた。翼賛文化運動下での地方文化振興についても、これら外からの新しい文化政策に無条件で追随することを戒め、「この点にかけては地方は國よりもよほど自由な立場に居る。即ち今までの文化を回顧し考察し、取捨選擇を以て保存と改定をきめることが出来る」と、各郷土の生活様式を担う者の自覚を説いた。

政治活動から離脱したかつてのマルクス主義者が「郷土回帰」

を行った例は、「三・一五事件」時の小林杜人を先駆として数多い。ほとんどの場合、それらの現象は、これまで自身の故郷、家族をかえり見なかったという獄中での後悔から、自分達が運動で得た体験を御破算にすることが前提となっていた。小林に代表されるこの種の郷土回帰を行った者の多くが、やがて戦時下の農本主義運動に関わっていったことに見られるように、この文脈で捉えられる日本人の郷土意識とは、国家・民族と対峙するだけの独立性を持ちえぬまま、戦時体制に絡め取られていくものだった。

日本に於ける土着文化の脆さは、もともと日本人の郷土意識に根強い中央志向性があり、土着文化が近代以降、地域主義へと発展していく要素に乏しかったことに求められてきた。戦時下の「郷土」に則して言えば、一九三〇年代の「農山漁村更生運動」を通した農村郷土の組織化もまた、国家機構によって容易に再編される日本の郷土意識の受動性が底辺にあったといえよう。

では、日本における郷土意識の受動性を認めたとしても、戦時下にあつてこのような郷土回帰とは別の回路をたどる郷土の受け止め方は、果して不可能なのだろうか。本稿の主題に則せば、それはマルクス主義を、「郷土」の前に放擲するのではなく、マルクス主義に立脚したかつての運動体験の中で「郷土」を捉えることはいかにして可能かという問題である。

一九二〇年代後半、いわゆる「分離結合主義」によって華やかに当時の論壇に登場し、マルクス主義運動を理論的に指導した福本和夫が柳田国男の門を叩いたのは、国による郷土称揚が公然とまったまさにこの時期のことであった。戦時下のマルクス主義者のほとんどが先に述べた国家主導の郷土回帰を媒介に翼賛運動へ流れ込んでいく中で、福本が郷土へ示した態度は大きく異なっていた。執筆統制が進んだ一九四二年春に出獄した福本は、郷里での調査事例を数多く含んだ簡素な近世文化・技術史考を仮名で発表することで敗戦までの数年間を過ごす。それはすなわち「非転向」であるということによってここでいう型の「郷土回帰」そのものを拒み通した獄中マルクス主義者とも異なっていた。福本の柳田への接近は、こうした「郷土」をめぐるマルクス主義者が見せた二つの異なる対応の狭間にあつて行われたのである。

福本和夫の行程

多くの指摘を受けている通り、戦時下の柳田民俗学は幾人ものマルクス主義者を影響下においた。その中にあつて福本和夫が「獄中一四年」を経て一九四二年春から敗戦までの一時期、柳田国男に師事したことは意外と言つてよいくらい注目されていない。たとえば、「郷土」を媒介とする柳田との交流の中で、かつて

のプロレタリア文化運動で培った民衆像を捉えなおし、戦時下の文学活動に自らの境地を切り開いた人物として、しばしば中野重治の名前が引き合いに出される。たしかに戦後、『村の家』（三五五年）が弾圧下のマルクス主義と郷土の問題を考える素材として再評価されるに及んで、中野と柳田の交流はその代表的な研究対象となった。しかし戦時下の文壇で展開された中野の活動に則して検討した時、柳田の民俗学が中野の心を捉えたのはむしろ『国語の将来』（三三九年）で柳田が行った日本語記述に対する提言、すなわち時局にかかわらず事実在即したありのままの言葉を書き連ねることで文章を論理的なものにしようとする姿勢であり、後述するような、柳田の指導で自らの郷土研究を行った福本に類する体験は、そこにはなかった。加えて戦後、福本が『日本近世の文化革命』（四八年）を刊行する際、尾佐竹猛が「日本ルネッサンス史論」への序文を一九四三年春に寄せたことへの謝辞「尾佐竹博士にささげるの言葉」を冒頭に掲げていることも手伝い、福本と柳田の交流は蔭に隠れてしまった観がある。

これに付随して福本の仕事を批評する際、絶えず問題となるのは、戦後になされた学際的な執筆活動と、かつての「福本主義」の時代に生まれた政治指導論文を比較対照することの困難さである。その結果、「福本の全理論・全生涯を研究対象として設定す

ることを敬遠させ」、「福本イズム」のみに集約させた研究で代り、「福本主義」の持つ圧倒的な抽象体系と地道な民俗採集を基調とする柳田民俗学の方法が余りにもかけ離れていることから、戦時下の福本と柳田の交流は十分な検証がなされないまま現在に到っている。

獄中に於ける「日本ルネッサンス史論」の着想が、三二年テゼと封建派の明治維新封建革命論のあやまりをその根源にまでさかのぼって批判すること^⑦にあったのは周知の通りである。それはまた、かつてコミンテルンから批判される一因となった福本の日本の捉え方、すなわち明治維新を不徹底ながらも「ブルジョワ革命」と見なす近代日本の位置づけを実証を踏まえて再確認し、維新後の国家権力体系を分析する基礎作業でもあった。だが同時に、一九二〇年代後半に福本が残した論考と、戦後の著述活動を比較する時、そこには際立った相違点がある。

第一に戦中に獲得し、戦後も保たれた彼の文体の平明さである。現在まで続く「左翼的悪文」の原型を作ったといっても過言ではない福本の文体の変容は、いかにして生まれたものなのだろうか。さらに前項に付随して、論理の形式の変化が挙げられる。『日本ルネッサンス史論』（六七年刊）の一支柱である洋の東西を越え

た近代絵画の対比に見る如く、事物、事実に則して自身の立てた仮説である「江戸期ルネッサンス」の証明に膨大な実例を引き、微細な関連事項であれ検証の労を惜まず、叙述に組み込んでいく手法は明らかに一九二〇年代のものではない。そしてこの形式は出獄した後、晩年まで一貫している。晩年の福本がかつて流麗に駆使した翻訳調の文体を嫌い、むしろ自身を实地の調査に向いていたと考え、「福本主義」が絶大な影響力を誇ったことを認めながらも、みずから三六年の釧路監獄に於ける「日本近世学芸復興期の総合比較」の着想を、敢えて「四十三にしてあぶらがのる」と回顧したことを念頭に置けば、福本の後半生の仕事に対する打ち込みと、その成果への自負が分かる。

このように福本の二つの活動期の狭間にあって、出獄から敗戦までの約三年間、その中でも出獄直後に行われた約三カ月の故郷滞在は、独自の領域を占めるのである。以上を踏まえた上で、マルクス主義者が逼塞を強いられたこの時期、柳田国男とその民俗学に向かった福本の内的な動機、そして今まで未解明の部分が多かった両者の交渉過程を跡付けることによって、「郷土」が果たした思想的役割を見るのが本稿の課題である。

- ① 大政翼賛会調査会第五委員会「『家』二閱スル調査報告書」(『資料日本現代史 12大政翼賛会』「大月書店 一九八四年」五七〇—七一一)

頁。

- ② 後藤総一郎監修「柳田国男伝年譜書誌索引」(三一書房 一九八八年)六三—四頁。

- ③ 柳田国男「文化政策といふこと」(『定本柳田国男集』第二四巻 一九六三年)四八三—四頁。以下、「定本」と略す。初出は「瑞木」一九四一年五月。

- ④ 高取正男「日本史研究と民俗学」(『岩波講座 日本歴史』25 別巻二 一九七六年)二五七—八頁。

- ⑤ 拙稿「中野重治の郷土意識——中野重治と柳田国男——」(『中野重治研究』第一輯 一九九七年九月)。

- ⑥ しまね・きよし、清水多吉「評伝福本和夫」(思想の科学社 一九八八年)二—三頁。但し本書は一九八七年に著者(しまね)が急逝したため、叙述は党再建大会開催を控えた一九二六年九月のところで中絶した。近年、戦前戦後にわたる福本の活動を統合して検証する試みが石見尚の著作「福本和夫『日本ルネッサンス史論』をめぐる思想と人間」(論創社 一九九三年)に於いてなされているが、柳田と福本の交流については年譜の個所で一九四二年八月、獄中で調べた方言や地名の由来、民俗について教示を受けたことを紹介しているにとどまる(同書三三八頁)。

- ⑦ 福本和夫「革命運動裸像」(三一書房 一九六二年)一四八頁。

- ⑧ 一九九五年九月一日、石見尚氏から筆者聞き取り。石見氏は戦後、福本と共に「日本ルネッサンス研究所」を主宰した。

- ⑨ 福本和夫「革命回想第二部 昭和の大獄」(インタープレス 一九七七年)一三六頁。

二 福本和夫の郷土研究

(1) 出獄前後（一九四一年二月～一九四二年五月中旬）

刑期満了までの福本は、一九四二年三月九日の「豫防拘禁請求事件抗告理由」が示すように、「依然トシテ共產主義ヲ信奉シ來リ本件（予防拘禁請求——筆者注）審理開始ニ際シ始メテ共產主義運動ヨリ離脱スベキ旨表明シ」たことが明らかになっている。この背後には、予防拘禁延長にともなう保護観察所入りという差し迫った危惧と、遠くは「二七年テーゼ」による党の過ちの福本に対する責任転嫁への憤りが伏在していた。^②三月一〇日の上申書には「日本歴史ヲ日本的ニ把握スルコトニヨツテ共產主義ヲ完全ニ拋棄」して「日本ルネッサンス史論」の完成に専心するとして、「斯學ノ大家ノ意見、研究ノ結果等モヨク調べ尚ホ實地ニ付テモ調査シテ完成ヲ期スル覚悟デアリマス」^③と答弁している。次いで翌日の三月十一日に提出した上申書の「将来ノ方針ニ就イテ」に、獄中で既に着手していた「近世日本學藝復興期ノ比較研究」が実地調査を要するという段になって、「柳田國男先生ニ見テイタダキマシテ、御教示ヲ仰グベク、スデニ其ノ御快諾ヲ得テ」^④いるという言葉が現れる。

ここで登場する柳田の「快諾」に到るまでの経緯を手短かに考証

しておく。前年の一二月、柳田國男の高弟で「民間伝承」編集長の任にあつた橋浦泰雄は、福本の友人で内科医の中本誠一から、次のような書簡を受け取る。

謹啓　まだ拝眉の榮不得申候へ共、安藤英方君や野村愛正君等とは鳥取中学時代同級にて御尊名もつとに承り居り候。（中略）福本君は倉中出身、松江高校教授中渡欧、当時よりボルセビズムに心酔、巨頭として受刑、十年をへて本月廿一日改心して出獄の身と相成候。其間中、植物、文藝方面等の研究し郷土に関する多方面の研究も有之模様にて、此の方面の研究に関しては柳田邦雄先生を權威として大に尊敬し、自由の身となりし後は是非／＼自分の研究について先生の御意見なり御閲覧なりを願ひ度く存じ、私も鳥取中出身、又一高時代及帝大時代同国人として知人の事につき斡旋がたを依頼されたものに有之候
〔以下略〕^⑤

当時、明治書院で編集者をつとめていた安藤英方と橋浦は頻繁に行き来があつたほか、野村愛正とは青年時代、ともに故郷の鳥取で雑誌「回覧」、「水脈」の同人として活動しており、三〇年代以降も在京の鳥取出身芸術家達の懇話会を通じて親交があつた。

この依頼は橋浦によってそのまま柳田に伝えられたと思われる。

橋浦自身、青年期郷里の鳥取で読んだクロボトキンの『相互扶助論』に触発され、上京後は本業の画家としてプロレタリア文化運動に従事し、「三・一五事」直後は一時期、ナップ（全日本無産者芸術聯盟）中央委員長をつとめた経歴の持ち主であり、民俗学に足を踏み入れたのも原始共産制の発掘が直接の動機だった。

三〇年代後半以降、活動の場を民俗学の組織運営に移して学会面から柳田を補佐し、一九四一年当時は、『民間伝承』編集長として「民間伝承の会」の運営を支えていた。柳田の「快諾」はこのように在京の同郷人達の緊密な連絡によって実現したのであった。

一九四二年四月二四日、福本は出獄する。五月一二日付で福本が橋浦に宛てた書簡は、「御蔭で多年念願ノ先生ニオ目ニカ、ルヲ得、感激致シマシタ」と仲介の労を謝し、「伯耆北条地方ノ訛言、方言、略語考ト題スル百頁足ラズノ拙イ一文ヲ清書シマシタシ、裁判所ニ提出致シテキマシタ近世日本学藝年表百数十枚ノモノモ返シテ頂イテスツカリ整理致シマシタノデ、近ク又先生ニオ目ニカカリ御一閱ヲ煩ハシ度イト存ジテ居ル次第デアリマス」と、来るべき調査への展望を語っている。

この書状から察する限り、福本の柳田訪問は五月初旬から中旬の間に行われたものと見られる。ほどなく福本は五月一九日、東

京を出立し、一七年振りに故郷の鳥取県東伯郡下北條村に帰る。

帰郷後、初めて柳田に宛てた書簡（六月一六日付）は、「先生からいただきました取調べもまだ一向に進まないので、漸く方言録の追補だけをまとめました」と近況報告をしている。「追補」の正編にあたるのは前掲の橋浦宛書簡にある「伯耆北条地方ノ訛言、方言、略語考」のことであり、福本は帰郷前にこれを柳田に手渡し、添削を乞うていた。福本が方言研究に着手した理由は表向きは「一面国語ノ有難サ」への理解の補足としてであったが、方言収録に福本がいかに熱心だったかは、郷里から順次柳田に送った採集手帖が示しており、最終的には「追補（十）」に及んだ。

そもそも福本の体系、法則を離れた個々の微細なものへの傾斜は、獄中での制約された環境、とりわけ監視下での思考表現を余儀なくされたことを遠因とする。

一九三九年一月二一日開始の日付を持つ、厳重な条件下で使用を許可された獄中での「雑記帳」は、「宗教書拔萃帳」と銘打たれ、仏教書からの書き抜きに始まり、個々の文字に関する豊富な用例の列挙など、単独では意味を持ち難い微小な言葉を書き連ねてある。その他、釧路の海霧の統計や、植物観察記に見ることく、拘禁中の福本の知的営為は、それ自体では体系を結ばない形式を

取することに於いて共通している。福本が自らの信条を歪めることなく、しかも獄中に於ける着想を持続し得たことの背景には、これら微細な事象への没入に負う所が大きい。そして奇しくも獄中で福本がとつた研究方法の性格と思想的な防御の姿勢は、そのまま柳田民俗学の研究様式と重なってくる。欠けているものがあるとするれば、それはまさに自らの手で行う実地調査に他ならない。出獄後間もなく柳田を訪れた福本の胸中には、それだけの切実さがあつたのである。

(2) 郷里での実地調査（一九四二年五月下旬～八月末）

六月二一日付で下北條から福本が柳田に宛てた書簡は、幕末期マニユファクチュアの実例を確かめるべく、本格的に調査を開始したことを記している。

一九日に始めて倉吉町に出でみました。字鍛冶町の沿革——稲扱の歴史。伯耆の刀工技術と稲扱生産の關係等々——をしらべてみたためでございます。「中略」さて、出倉のため風邪をひいてしまいました。全身のだるさが一層加はつてまいりましたが、昨日と今朝とで、此の北条方言追補其の二を書きあげました。語数は九十ばかりでございます。御一閱をただけま

すればありがたく存じます〔以下略〕^⑩

このあとの文面には近々旧友が任職をつとめる寺に水墨画の調査に行くと、今後の予定が綴られている。「方言追補」の正編「伯耆北條地方の訛言・方言・略語考」は、先に述べた通り福本が柳田に初対面の時、既に提出してあり、これ以降福本は順次郷里からこの採集手帖の追補を送り続ける。伯耆、石見で生まれた人間にとつて千刃稲扱（榊齒状の稲脱穀用農具）やタタラ製鉄の話は、幼時から郷土の伝承として聞くことが多く、獄中で日本に於けるマニユファクチュアの存在を思い至つた時、福本が即座に同地の刀工、千刃稲扱にその着想を当てはめたのは、むしろ自然といえよう。表象へのこだわりという点で刀工、千刃稲扱、水墨画は同質であり、郷里で行われた実地調査の対象だった。

目立たないことだが、「方言追補」も一連のマニユファクチュア検証の合間をぬって行われている。当初、福本にとつて民俗語彙の採集は「修史ノ餘暇ヲ以テ、思ヒ出ヅルママニ何ノ秩序モナク書キツラナクモノ」^⑪に過ぎなかつた。しかし千刃稲扱、刀工技術の調査が本格化するに及んでも中絶することはなかつた。二つの系統の調査は一見無關係のように見える。しかし翌年、実弟の名義で刊行した『技術史話雑考』を見ると、福本は千刃稲扱の歴

史を記録する際、多くを同地の古老から取材したほか、作業行程に於ける技術用語や部品名については倉吉地方で使われる名称で記している。さらに直接は関係しない鍛冶屋の祭神「カナイゴサン」を主神とする倉吉の祭の概要、職人にまつわる諺などを逐一紹介した^⑭。郷土誌を思わせるこの記述様式は、明らかに民俗語彙採集をふくめた総合的な郷土の実地調査の中から生まれたものといつてよい。

並々ならぬ福本の採集への熱意に対して柳田も返信を書いている。

第四回目の御蒐集本日着 拝見しました中々熱心なる御観測やがて何かになり可申候 ともかく御出京の時まで御預かり可申候 御入用の折一度御返し候 そのうち追々と隣接地の事実も御見比べ可成候と存候

七月四日^⑮

通り一遍の文面と見ることもできよう。しかし民俗の地域差に注目して、それらを比較総合することで生活習俗が変遷した様を探ろうとする柳田の「重出立証法」を示唆する文言である。そしてこの種の手紙を柳田は、僻村で民俗調査を行っている門下生、

あるいは地方在住の研究者に宛てて過去十数年にわたって書き続け、彼らを励ましてきたのであり、その意味に於いて柳田の対し方は福本に於いても変わるところはなかったと見るべきである。一方、郷里から福本が七月一日付で橋浦に宛てた甚だ長文の手紙は、柳田宛のものと多くは重複するものの、はるかに打ちつけた筆致で帰郷後の生活、調査の進行状況を伝えている。

拝啓 暫く御無沙汰失禮いたしました。益々御健祥の事と存じます。

先般ハ御邪魔仕り種々御高話拝聴いたしました感謝に堪へませぬ、家族制度の御研究拝読、唯々感嘆の外ありませんでした。三鷹台駅の豊葦原である日褐色の鳥がギョウゴしく啼いておりましたが、あれが葦切——行々子とか申す鳥でございますか。こんどおあいできます折に御教示願います。「中略」方言採集の方は熱心にやりました、帰りましたその日から、手帖を出して家人や村人の談話の中より採集いたしましたして追補その一、その二、その三をすでにその都度柳田先生へ送りまして、今はその四をほゞ書きあげてをります。「中略」木地山と小椋姓のことを伺ひましたが、鳥取県に竹田の木地山の外、船上山の東麓に山川木地、大木地といふ町があるやうですね、そして作州木

地山（これは鳥取津山線に近く、伯耆境にあり）出身で目下倉吉に居住の小椋某といふ人にあひましたよ、

家族制度の御研究中に皿口裡やカマドの事が詳はしく説かれてございますが十七年振りに郷里にかへつておどろきましたことのひとつは昔なつかしい皿口裡と共にカマドも亦、農村から殆ど全く絶滅してしまつてゐる事でした、「中略」倉吉の稲扱の歴史、昔の刀工技術から稲扱生産への転換などの事もしらべてみたく、その準備には手をつけてゐますが、まだはかどりません、鳥取砂丘を一度実地に踏査してみたいのですが、まだ足を挙げるには至らないのである仕末です〔以下略〕^⑩

三鷹台駅は杉並の久我山にある橋浦宅の最寄りにあり、帰郷するに當つて、福本は橋浦を訪問したのである。橋浦が鳥取の岩井郡大岩村の出身で、因幡・伯耆地方に残つた生活習俗を熟知していることから、福本は静養を兼ねて故郷で実地調査を試みるに先立つて、橋浦の助言を求めたと見られる。しかしそれ以上に、長期の検束から解かれて間もない頃、思想的にはクロポトキンの無政府共産主義の影響を色濃く残し、時局下で『民間伝承』を発行し続け、流れに抗していた橋浦の様な人物と出会うことから得られた福本の安堵感は想像に難くない。また、多くの面で福本の郷

里と重なる生活習俗を身に付けた橋浦の物腰は、出獄直後の福本の心を癒したに違いない。

福本が橋浦に「木地山」、「小椋」について尋ねたという記述は、近世日本に於けるマニユファクチュア成立の検証を志していた福本が、木製雑器製作の職能集団たる木地屋にその形態を求めたことを窺わせる。^⑪そして橋浦は、民間伝承、民俗語彙の意味を問われれば、即座に具体的な事例をもつて答えることのできる老練なフィールド・ワーカーでもあった。福本と橋浦の邂逅は弾圧が最も苛烈を極めた時期、研究素材としての「郷土」を通して初めて可能となつたのである。

橋浦の八月六日付の返信は、当時ほとんど一人で編集を担当していた『民間伝承』の事務が多忙を極め、手紙が遅れたことを詫びつつ、併せて福本の近況について「永い間の苦勞だったのでからお疲れの出るのは當然、つかえてゐた天井が除去されて気はせくるでせうが逆にとめて放心の方計を取」ることを勧め、自ら教示した「船上山付近の木地山」を、「機會でもあつたら行つて見たいようにも思」うと述べている。^⑫

これと前後する福本の八月一二日付の書簡は橋浦の示唆のもとに継続中の木地山研究に触れている。

東伯地方の木地屋部落は竹田の木地山、船上山麓の山川木地、大父木地の外なほ中津村、実光（竹田川流域）などの地にも小椋姓が大部で木地製作をやつてゐる由き、ました〔中略〕船上山麓の木地屋部落がお話のやうでしたら小生も一度行つてみませうかしら？

私など何ら木地のことに知識のないものが行つてみたつていい採集のできる自信なんか毛頭ありませんが——貴下自ら御出馬あつてはいかゞ。

そしたら小生も驥尾に附することができてうれしく思ひます^⑩
結局ここにある橋浦の伯耆行きは実現しなかつたが、ひとつの着想を論証するに当たつて、民俗採集という帰納的な手続きを加味した福本にとって、橋浦は得がたい助言者であつたことが窺い知れる。

八月二七日付の柳田宛書簡で福本は「方言追補其の十」を発送した旨を記すとともに、約百日間にわたつた郷里での静養と実地調査を切上げ、二九日に再上京することを伝える。柳田は前もつて、八月一三日付の葉書で福本が送つた「方言録」を添削し、福本が上京する時に返却することを知らせていた。

〔「方言録」追補〕第八回分も拝見 この短日子二是だけの御蒐集は大努力と存候も今後自然にあらはれ来らるるのにも價高きもの多かるべしと存候 御原稿ハ人々ニ示し終りに自分の所にて大切に保管いたし居り候 再度御入用の時御返可申候 なほ肝属郡方言集一度御精読いたし度あとくも御送可申候

八月一三日^⑪

簡潔な言葉の中に、あらかじめ恣意的に目的を設定した研究態度を嫌う柳田の姿勢が現れている。その点で、江戸期に於けるルネッサンスの到来という確固たる目標を想定して調査を行う福本との間に方法上の違いを認めざるをえない。^⑫しかし一九四二年という戦争の最中、福本が郷土の実地調査を行い、その結果を柳田に送り、柳田がそれを添削して送り返すという作業そのものが驚くべきことである。一方の福本は、「三二年テーゼ」への反駁を企図する構想を秘めながら、その布石として主観を交えることのない採集手帖を送り続けたのである。柳田はそれに民俗学者として誠実に応えようとした。二人のやりとりを見る時、そこに研究環境としての柳田民俗学がこの時代に発揮した強みを読み取るこゝができる。

(3) 再上京（一九四二年九月以降）

上京後、日を置かずには福本が橋浦に宛てた書簡には九月二日に柳田に面会し、同年七月に出た『増補風位考資料』（関口武と共著）を進呈されたことが綴ってある。「方言録」も恐らくこの時返却されたと見られる。柳田は「方言録」のすべての頁にわたって入念な書き込みを加え、福本が未詳、疑問を記した箇所には正確な語源や隣接地の事例を葉に書き付け、福本の労をねぎらっている（別表参照）。これ以降、福本はしばらく埼玉県川口市に仮寓し、一月下旬には柳田の紹介で尾佐竹猛を訪れ、以後、頻繁に史学考証上の指導を仰ぐ。

これ以降も福本と柳田の交流は、悪化する戦局の中で継続されている。一九四四年元旦から始まる『炭焼日記』には、息子の福本邦雄が同年の三月三〇日に成城の柳田邸を訪れ、「父の為に『御蔭参り』の資料を借りて行」き、四月一六日にそれを返却して今度は「服装語彙」を借りて行ったとある。前年の十一月に福本が倉吉中学時代の旧友吉岡永美の名前で刊行した『抜け参りの研究』（北光書房）には巻末に資料提供者として柳田への謝辞が記してあるが、この記述はその時の延長であろう。

一九三〇年代以降、柳田民俗学に足を踏み入れた転向マルクス主義者と柳田との交渉は、彼らの「民間伝承の会」入会がひとつ

別表 福本和夫「伯耆北条地方訛言方言略語考」に対する柳田国男の添削例

福本の採集手帳の記入	柳田のコメント
<p>神主ノコトヲタヨサント云フ。 サンハ敬称ダガ、タヨトハ何ノ意味カ、筆者ニハナホ未詳デアル。</p>	<p>「タヨ」サン 山陽ノ方ハ太夫、「タイプ」トハツカリイフ、全国ノ両端ニ尤モ弘クツカハル、語</p>
<p>オ尻ヲケツト云フハ、穴ノ音讀カラ來タモノ乎。思フニコレハ田ノコトヲ此ノ地方デハ一般ニタンポトイフガ、タンポトハ漢語、田團（デンボ）ノ訛デアラウ。</p>	<p>「ケツ」ノ發生ニ対スル私見 ゲツツ、ゲツツ、ゲスモーツテ多分ツメ（終り）ニ賤称ノ「ゲ」ヲソヘタモノ、穴ノ漢字音デハナカラウタンポニ田團ハ後カラノ宛字、</p>
<p>シヤカン 左官 シェンシェイ 先生</p>	<p>SハモトShナラン 誰カノ論文ヨリ九州ハコトニコノ例著シ、</p>
<p>火事ガイル (砂丘ノ) 落松葉ヲ掻キ集メテ貯メテオイテ、燃料ニスルノダガ、コレヲ松葉カワトハイハズ、松葉ヲサデルト云ヒ、名詞ニシテ松葉サデト云フ。 唐辛子ヲ称シテ一般ニ胡椒トイフテイルノハ、マチガヒデアアルガ、ソレニハ理由ガアルノデアツテ、単ニ一笑ニ付シ去ルベキデハナイト思フ。石油ノコトヲ石炭アブラトイフノモ、一寸オカシイガ、此頃ハ液化法ニヨツテ石炭カラモ油ガ採レルカラオモシロイデハナイカ。</p>	<p>火事ガイル ハメズラシ 中播デハ「火事ガイク」行く 蕃椒ヲ「コシヨウ」トハ九州一円中部デハ東美濃カラ信州ヲ経テ越後海ニ達スル一帯ニ 石タンアブラモ中国以南ニ弘シ 沖繩ニテハ単ニ「セキタン」トイヒ、或地デハ誤ツテ「セキタンサン」トサヘイフ</p>
<p>一九三〇年代以降、柳田民俗学に足を踏み入れた転向マルクス主義者と柳田との交渉は、彼らの「民間伝承の会」入会がひとつ</p>	<p>福本和夫「伯耆北条地方訛言方言略語考」（手書き）鳥取県立博物館所蔵より作成。</p>

の目安となる。本来福本もこれに倣って不思議はなかったが、管見の限り福本が同会に入会した記録はない。^{②③}依然として保護観察下に置かれていたことを考えれば、柳田への憚りが最大の理由であろう。そもそも福本が橋浦という希有の媒介者を経ることで柳田と接触した事実を振り返れば、福本と柳田の交流はもともと研究会組織ではない、あくまで個人的な人間関係によって形成され、継続したものであったと言える。加えて戦時下の「民間伝承の会」は水野成夫、浅野晃ら二〇年代後半の福本主義者で、その後翼賛主義へと転じていった者達を含んでいたことを考慮すれば、彼らとは距離をおきたいというこの時の福本の姿勢は理解できる。^{②④}この時点で柳田の許にはかつての福本主義のイデオログが今や翼賛運動の担い手として出入し、柳田に戦時下のアジア地域で異民族の研究に乗り出すことをはたらきかける一方で、彼らの「師」であった福本が郷里の民俗調査の教示を乞うために来訪するという一見奇妙な現象が生まれるのである。

戦後矢継ぎ早に刊行される福本の近世日本の学芸復興を扱った論考の登場は、一九三六年の釧路刑務所での着想が、獄中に於ける微細な事実の記録を経て再構成されたことを意味する。いわばその途上にあたる一九四二年、柳田さらには橋浦の助言を受けて行った郷里での調査は、収監中に得た仮説を初めて可視的、触感

的な手ごたえをもって検証する機会となった点で、その後の福本を論じていく上で重要な時期を占めるのである。

晩年の梟の研究を挙げるまでもなく、福本の「小さきことども」へのこだわりは以後も変わることはなかった。こんにち現存する橋浦からの最後の手紙は、その梟に関する郷里の小さな事実を紹介したものである。

私の在郷中（明治四十五年迄）家の裏山で梟の鳴くのをよく聞きましたが、村の者は明日が晴天の場合は

ホウホウドロツケホウホウ と鳴き、又明日が雨天の場合は

ホウホウドロツケホウホウ と鳴くと言っていました。そう

思つて聞けば、ノリツケの方はいく分冴えた音声だけでも、

それをノリツケとはどうにも聞き取りがたく、やはりドロツケ

としか聞きとれませんでした^{②⑤}

以下、橋浦は梟の鳴く音を出すための笛を指で組む図解まで入れた説明を加えている。この書簡が送られた一九六四年四月の時点で、福本は既に戦後復党した共産党から離れ、一方で橋浦は戦後になって初めて得た党籍をまだ維持していた。しかしその両者の間には右の書簡が示すような郷土の伝承を媒介とした交流が続

いていた。この起点に二人の柳田民俗学をめぐる邂逅の体験があったことは言うまでもない。両者はむしろ「同郷人」であること結び目として、戦後に到るまでの交友を続けたのであった。

- ① 「福本和夫に對する豫防拘禁請求事件記録」（奥平康弘編『昭和思想統制史資料』第三卷「共産主義・無政府主義篇3」）生活社 一九八〇年 所収）三六一頁。以下、「福本記録」と略す。
- ② 石堂清倫「中野重治と社会主義」（勅草書房 一九九一年）一四一頁。
- ③ 「福本記録」三六三頁。
- ④ 同前 三七六頁。
- ⑤ 中本誠一から橋浦泰雄宛書簡（一九四一年二月一九日付）橋浦赤志氏所蔵。「」内引用者。「倉中」とあるのは倉吉中学のこと。
- ⑥ 福本和夫から橋浦泰雄宛書簡（一九四二年五月二日付）橋浦赤志氏所蔵。
- ⑦ 福本和夫から柳田国男宛書簡（一九四二年六月一六日付）石見尚編「福本和夫書簡抄」（日本ルネッサンス研究所 一九七八年）一七頁。
- ⑧ 「福本記録」前掲 三六三頁。
- ⑨ 福本和夫「宗教書拔萃帳」第二輯。日付、頁数記載なし。神奈川近代文学館所蔵。第一輯の終了日付は一九四〇年一月二六日であることから見て、第二輯はそれ以降である。
- ⑩ 福本 前掲「革命回想第二部 昭和の大獄」七四頁、一七二—二〇六頁。釧路収監中の福本の読書に関する制限は、東京帝大法学部時代に知己となっていた佐藤藤佐（戦後、検事総長。福本の収監中は東京地裁判事、東京控訴院判事）の計らいによって緩和された（一九九二年八月二八日、福本逸子氏から筆者聞き取り）。

- ⑪ 福本和夫から柳田国男宛書簡（一九四二年六月二日）前掲「福本和夫書簡抄」一八一—九頁。
- ⑫ 福本和夫「伯耆北條地方ノ訛言・方言・略語考」の「ハシガキ」、頁数記載なし。鳥取県立博物館所蔵。
- ⑬ 多賀義憲「技術史話雑考」（北光書房 一九四三年）序文三頁。多賀義憲は養子に行った福本の実弟である。同書で福本は倉吉の稲扱行商人が行商先の播州辻川で聞いた風評から、柳田の美父・松岡操（号は約齋）が漢学者として鳥取赤崎の名望家に招聘された話を紹介している（五三—四頁）。
- ⑭ 同前 四〇—四四頁。
- ⑮ 柳田国男から福本和夫宛葉書（一九四二年七月四日）神奈川近代文学館所蔵。
- ⑯ 福本和夫から橋浦泰雄宛書簡（一九四二年七月一日付）橋浦赤志氏所蔵。「」内引用者。「家族制度の御研究」とあるのは、橋浦の「日本民俗学上より見たる家族制度の研究」（日本法理研究会 一九四二年）のことである。帰郷に先立って橋浦に進呈されたものと見られる。
- ⑰ この着想は「日本工業の黎明期」（未來社 一九六二年）の中で箱根、小田原に於ける挽物業の運営形態として紹介されているが（同書二三七—三三八頁）、本来の本地屋については元々移動を身上とする職能集団であり、都市への定着が希薄なままに終った点から当初設定したマネュファクチュアの範疇への適合が難しいと判断したためか、「日本ルネッサンス史論」への当てはめは成されずに終わっている。
- ⑱ 橋浦泰雄から福本和夫宛書簡（一九四二年八月六日付）神奈川近代文学館所蔵。
- ⑲ 福本和夫から橋浦泰雄宛書簡（一九四二年八月二日付）橋浦赤志氏所蔵。「」内引用者。

⑳ 福本和夫から柳田国男宛書簡（一九四二年八月二七日付）前掲『福本和夫書簡抄』二二頁。この時、倉吉十刃稲扱、木地屋の調査記録も同封して柳田のもとに届けられた。

㉑ 柳田国男から福本和夫宛書簡（一九四二年八月一三日付）神奈川近代文学館所蔵。「」内引用者。

㉒ 戦後、柳田は「福本和夫君などは日本にもルネサンスがあった、それをきめようという考えでかなり前からへばりついている。日本は国からとしてそういうものもなく、ただだからだらじりじりと、目に立たずに移り動いたと考えてよい」（民俗学から民族学へ）『民族学研究』一九五〇年二月号（折口信夫、石田英一郎との座談会）九頁）と発言している。

㉓ 福本和夫から橋浦泰雄宛書簡（一九四二年九月三日付）橋浦赤志氏所蔵。

㉔ 柳田国男「炭焼日記」「定本」別巻第四（筑摩書房 一九六四年）三八頁、四五頁。初出は同じ題名で一九五八年に修道院社より刊行。同書で福本自身の名前は登場せず、福本邦雄の父として記載されている。

㉕ この判断の典拠は「民間伝承」（復刻版）第四、五巻（国書刊行会 一九七二年）所収の一九四二年から四四年までの「民間伝承の会」新入会員紹介欄、及び「昭和一九年度「民間伝承の会」会員名簿」（成城大学民俗学研究所所蔵）による。

㉖ 戦後の回顧の中で福本は、多くの福本主義者を輩出した東大新人会について評価しないとしている（五味川純平、石堂清倫編『思想と人間』〔角川書店 一九七四年〕三三三、三四七頁）。戦時下の翼賛運動へ流入していったマルクス主義者と柳田民俗学の関係は拙稿「柳田民俗学と東大新人会——大間知篤三を中心に——」（『史林』一九九四年

七月）を参照。

㉗ 橋浦泰雄から福本和夫宛書簡（一九六四年四月二三日付）神奈川近代文学館所蔵。

三 結 語——福本の故郷探訪の意味——

戦後の福本の著述活動について中野重治は多くを語っていない。ただ、東京帝大新人会の活動家として学生時代を過ごした中野にとつて福本和夫とは、まず「分離結合主義」によつて論壇に登場した希有の理論家であり、その後の福本を評する場合にも、絶えず頭の片隅を占め続けたに違いない。中野自身、このことを自覚していた節があり、後進の文学者に福本の「日本ルネッサンス史論」の感想を求め、その評価を促すことがあった^①。戦後、自身の新人会時代を扱った『むらぎも』の中でも、銜学的な用語をもつて「福本主義」に阿諛追従する学生達とは別個に、福本その人は素朴な魅力を持った人物として描かれている^②。

福本の仕事を虚心に見ようとする、中野の態度は何に起因するものなのか。『村の家』に描かれた体験を通して、眼に見えない形で国家に絡め取られる「家」と「郷土」の姿を垣間見た点で中野もまた、福本に於ける「二七年テーゼ」に象徴されるコミンテルンの権威主義に比すべき、戦前期のマルクス主義運動が看過し

てきた問題を感じ取っていた。こうした体験を経て、コミンテルンが「普遍的真理」として提示する近代日本像に対して如何に論駁するかを自らの課題とした福本が、柳田の許を訪れ、戦時下に郷土研究を行ったことに中野は或る親近感を抱いたに違いない。

柳田の民俗学が採集事例を積み重ねて行くことから出発する経験的な方法を基調としたことは周知の通りである。ここでは、たとえ一つの採集事例であっても、それと関連付けられる事例が見つかるとは早まった意味付けをせず、採集されたままの状態に置かれた。そして仮説の形成とは、固定された法則の呈示という形はとらず、時間の流れの中で一定の方向の存在を示唆するという様式をとった。^③この点に於いて柳田の民俗学は、ひとつの理論の正否をめぐる論争が闘わされ、白黒はっきりとした決着を導き出そうとするマルクス主義の持つ研究の体質とは明らかに異なっていた。このことを傍らに置く時、かつてコミンテルンによって肅清の危険にすら曝された体験を持つ福本が、獄中から出獄、帰郷に到る過程で郷里の伝承であるタタラ、千刃稲扱、木地師にこだわり続けたことは見逃せない。「郷土」とは福本にとってコミンテルンの史観を反駁するための仮説作業を実施する上で、最も確かな事例を提供してくれる場として選び取られたのであった。このことは戦時下のマルクス主義者にとって、郷土が果たした新

たな役割と方向性を示すものといえよう。その際、柳田の民俗学は信頼できる郷土像を与えるものとして機能したのである。

戦時下にあつて、自らが直面した体験を個人の内面で持続させる少数のマルクス主義者にとつて、柳田民俗学が時局にかかわらず維持した郷土研究の場は、自身の体験を発火点とする課題と着想をあたため、かつ検証していくための場として捉えられたのであつた。

① 大江健三郎、柄谷行人「中野重治のエチカ」〔群像〕一九九四年九月号）一七〇—一七一頁。

② 中野重治「むらぎも」〔中野重治全集〕第五卷〔筑摩書房 一九九六年〕一三五頁。

③ 柳田国男「郷土生活の研究法」〔定本〕第二五卷〔筑摩書房 一九六四年〕三二五—六頁。

本稿作成にあたって貴重な資料の閲覧、ならびに引用を許可してくれた柳田為正氏、福本逸子氏、中本弘氏、橋浦家の方々に感謝する。

（京都文教大学助手